
俺が、異世界を救う？

その輪廻の先にある物は・・・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が、異世界を救う？

【Nコード】

N5414R

【作者名】

その輪廻の先にある物は・・・

【あらすじ】

え？あらすじ？そんなものは、決してない！あるはずないだろう！だって、プロローグに全部書いてしまっているのだからwwとりあえず、言える事は異世界系で主人公最強？です。

（1～3日に1話ずつぐらいの更新速度でいけたらいいなと思います。）

プロローグ（前書き）

どうも、初めましての方は始めましてw
前作を見ている方は、お久しぶりですw
その輪廻の先にある物は・・・です。

正直、面白いのかどうか、自分でも分かりません^^；

自分が、とりあえず納得できるという内容にしているので・・・

まあ、楽しんでいただければ幸いです^^

それでは、本編プロローグのほう どうぞw

プロローグ

とある宇宙の

とある星の

とある時代の

とある時間の

とある大陸

『グゼリア大陸』

に

とある勇者と、とある魔王がいた。

勇者は、旅の途中で仲間になった人たちと

この大陸を魔王の支配から護るために戦った。

魔王は、向かってくる敵

勇者

を倒すために戦った。

あるときは、勇者達が傷を負い

またあるときは、魔王が傷を負った。

幾度と続いた戦いの末、勇者達は魔王を打ち倒し、平和を手に入れた。

しかし、それはつかの間のことだった・・・

そう、世界は滅びようとしてた。

大陸の平和を護ることはできたが
引き換えとして、世界を護ることはできなかった。

なぜならば、世界は魔王と繋がっていたのだから・・・

魔王が死すれば世界は死に
世界が死すれば魔王は死ぬ運命だったのだ。

それは、誰にも予想することはできず
そして回避することすらもできないことであつた。

だが、勇者達はある決断をした。

そう

それは

神々に頼み、この世界を救ってくれる人間が現れるまで、この世界
の時間を永久的に止めてしまうこと・・・

人々は、変えられぬ運命を変えるために、それに同意した。

そして

神々に、人々は皆共に祈り

神々は、世界の時間を止めた。

この、物語は、この世界を救うために現れるであろう『モノ』が現れ、そして救うまでの物語である。

プロローグ（後書き）

んゝ・・・なんか、ぱつとしない・・・^^；

やはり、文才ないですね・・・私・・・

まあ、楽しんでいただけてたら幸いですw

ちょっと、いろいろと立て込んでいて更新が鈍足かもしれませんが
お気に入りに入れてもらって、たまに確認でもしていただけると
更新しているかもしれません（^^A^；

それでは、また次回お会いいたしましょう！！

第1話（前書き）

どうも、その輪廻の先にある物は・・・です

地震の影響やばいですね・・・日本どうなるんだろ・・・

とりあえず気持ちを切り替えて、第1話どうぞ

第1話

突然だが

この世界は、つまらない。

同じことを繰り返すだけの毎日。

何も変わらない、何も変えられない。

俺は、そう考えている。

現に今、俺は学校・・・詳しく言えば、高等学校で、つまらない授業を受けている。

授業内容自体は変わるが、卒業までは毎日同じ日々を過ごすだけ。

何も変わらない日常が、俺はとてもつまなくて

そして、面倒だった・・・。

「であるからして、この公式を当てはめると

」

今は数学の授業中で数学の教員が、教団に立って、そんなことを言っ
て公式を書いていた。

俺はというと、席が丁度外の窓側の一番後ろなので

ノートと教科書だけを開いてあとは、頬杖を突いて、窓の外を見て
いたりする。

（やはり、なにも変わらないな・・・。）

俺は、そんなことを考えながらも授業中は、ずっと空を眺めていた。

(キーンコーンカーンコーン)

すると、授業の終わりを告げる鐘になる。

「それで・・・って、もう授業終わりか。よし、このあと問題は宿題にしておく。各自ノートに書いておくように。」

そんなことを、言って教員は教室を出て行った。

教員が出て行くと、クラスの連中は隣や友達などと話をし出したり、弁当を食べ始めたり、教室をでて行ったりしていた。

時間的には、ちょうど昼休みなのだ。

そんな時の俺はというと、相変わらず窓の外を眺めていた。

「ん？皇杞は、また空眺めてんの？」

そんな俺に、声をかけてきたので、横を見てみると

「・・・なんか用か？四季咲」

四季咲しきさい 陽平やうへいという

入学当初からしつこく俺に付きまとうやつだった。

「なんか用かって・・・親友に、そんな冷たく言わなくてもいいじゃないか。」

「誰が、親友だ。誰が。」

「お前だよ、お前。」

「誰だよ、お前って？そんな名前のやつ知らんぞ俺は。」

「お前は、子供かつ！？・・・俺の目の前にいるお前だよ、すめらぎ皇杞
幸也君？」

そう言いながら、俺へと指を指してきた。

「君付けするな、気持ち悪い。虫唾が走る。」

「ちょ！？そこまで言わなくてもいいだろうがよ！」

「うるさい、少し静かにしろ。うるさくて面倒だ。」

そう言いながらも、俺はまた空を眺め始めていた。

すると、四季咲が

「なにか、見えるのか？」

「いや何も」

「じゃあ、なんですつと外眺めてんのさ？」

「・・・つまらないから。」

「は？」

「何も変わらない日常がつまらなくて、することがないからずっと眺めているだけだ。」

「ふーん。ま、なにかおもしろいもん見つけたら教えてくれよ。」

「ああ。」

そんな、会話をした後、四季咲はどこかへ行ってしまった。

俺は、やっと静かになったと思いつつながら

放課後になるまでずっと空を眺め続けていた・・・。

第1話（後書き）

はい、後書きです。

やっぱり、文才ないんだろうな・・・
なんか、会話ばっかだった気がする^^；

コメントや誤字脱字の報告などお待ちしております。

今回は、皇杞と四季咲のキャラ設定でも出そうと思っています。

では、また次回お会いいたしましょう

キャラ設定 その1 (前書き)

どうも、その輪廻の先にある物は・・・です。

予告通り、今回はキャラ設定です。

キャラ設定 その1

【名前】：皇杞^{すめらぎ} 幸也^{ゆきや}
【身長】：178cm
【誕生日】：9月14日
【年齢】：17歳（高校2年）
【容姿】：一般的な黒髪黒眼（キャラ画的には、屍鬼の結城 夏野）
【好きなこと】：空を眺めること、読書
【嫌いな物】：気に入らないやつ
【備考】

家は一般的。体格は細いが、スポーツは基本的に何でもこなせる。テストの成績も、上の中と頭がいい。但し、世の中がつまらないと思っていて、授業をまともに受けていないので、そのせいで教師からの評価点は低い。口数も多いほうではない。

容姿はいいので案外モテる。（10人中7人は振り返るくらい・・・？）

しかし、性格からか彼女いない暦〃自分の年齢である。

本人は、彼女はあまり必要のないものだと考えてはいる。

・能力（単位はE～EXで表します）

【体力】：C-
【魔力】：無
【筋力】：C
【耐久】：D-
【俊敏】：C+
【知力】：B
【幸運】：C
【宝具】：無

【危険察知】：C

【名前】：四季咲しきやうめ陽平ようへい

【身長】：173cm

【誕生日】：8月26日

【年齢】：17歳（高校2年）

【容姿】：茶髪黒眼（キャラ画的には、弟キャッチャーで俺ピッチャーで！の笹崎 新平）

【好きなこと】：特に無し。

【嫌いな物】：特に無し。

【備考】

家は一般的。成績のほうは、中の中と平凡。授業はちゃんと受けていない。

容姿も普通。特に突発した所はない普通のやつである。
あるとすれば、ノリがいいのと、明るいことくらい。

入学式の時に隣が皇杞だったため、入学当初から話をかけていて、親友だと思っている。

時々、姿が見えないと言われるときも・・・？

・能力

【体力】：C

【魔力】：無

【筋力】：D+

【耐久】：D

【俊敏】	：C ⁻
【知力】	：C
【幸運】	：D ⁺
【宝具】	：無
【危険察知】	：C ⁺

キャラ設定 その1 （後書き）

とりあえず、現時点の主人公（皇杞）の能力と四季咲を書いてみました。

まあ、少しの間は、日常の話になると思います。

もしかしたら、つまらないかも^^；

では、また次回お会いいたしましょう。

第2話（前書き）

どうも、その輪廻の先にある物は・・・です。

んゝ・・・地震のせいで、電力足りなくて強制停電させられる地域があるみたいですネ^^；

皆さん、大変でしょうが、がんばりましょう！

それでは、第2話どうぞ

第2話

俺はあれから、家に帰った。

正確に言つと、すでに家の自分の部屋にいるわけだが。

結局は家に帰ってもすることはなく、ただただベットの上で寝転んでいた。

ここで、つまらないことだが家族構成でも言っておこう。

父、母、俺、姉の4人家族で、俺と両親は同じ家に住んでいるが、姉は一人暮らしをしている。

というのも、姉は現在アメリカにいて、最新の医学を研究しているのだそうだ。

なぜ、確信がないかというと、年はかなり離れているため会った覚えがなかった。

それに、アメリカに行ってから、一度も家に帰ってきたことはないそうだ。

たまに、国際電話がかかってくることもあるらしいが、俺には興味のないことだった。

自分の姉がどうしていようが、俺には関係ない。どうせ、なんにも変わらない日常なのだから。

その日はいつも通り、夕飯を食べた後、風呂に入り、就寝した。

（結局、今日もなにも変わらないか……。ま、期待しても意味は

ないか。)

そんなことを考えながら、俺は眠りについた。

・ ・ ・ ・

↓次の日↓

朝、目が覚めると俺は、不思議な所にいた。
いや、『空間』と言ったほうが正しいのかもしれない。

なぜなら、俺の周りはずべてが

”白かった”のだから。

「なんだ、ここは？」

自然と俺は愚痴をもらした。

それは、そうだろう。

なぜなら、起きたら自分が『白い空間』にいたのだ。
驚かないほうがおかしい。

「・・・夢でも見ているのか？」

そう思うしか、俺にはできなかった。

なら、もう一度眠るとす「・・・」

「いや、ここは夢の世界ではないぞ。」

「（！？）」「

急に声をかけられたことに驚いた俺は、飛び起き周囲を確認した。

すると、俺の後ろに白い服を着て荒削りな杖を持った爺さんがいた。

「誰だあんたは？」

「ふむ、言葉がなっておらんの、小僧。・・・まあよい、それくらい威勢のあったほうがよろうて。ここに来たということは、お主が例の『モノ』か。」

爺さんは、俺を見極めるような目で見ていた。

「例の『モノ』だと？なんだそれは？」

俺は、疑問に思ったことを質問してみた。

「・・・そうか、なにも知らないのは当たり前か。ならば話すとするかの。」

そう言っていると、爺さんは真面目な顔になり、話をしだした

「ああ、頼む。」

「・・・まず、この世界とは違う、言えなれば異世界が無数にある。その異世界は、お主の住んでいる地球で、お主が女じやったり、もしくは存在しないというような世界がある。お主たちの言葉を借りるとするならば、パラレルワールドというものじゃ。その無数にある異世界のなかの1つの星に『グゼリア大陸』というものがある。

そこは緑豊かで、人間族、魔族、エルフ族、獣人族、天使族住んでおった。あるとき、魔族の王『魔王』が人間族、エルフ族、獣人族、天使族の国を侵略し始めた。人間族、エルフ族、獣人族、天使族は抵抗をしたが、打ち勝てるものはいなかった。魔族は、その間に、大陸の4分の3を支配し、最後の侵略をしようとしていた。そんな時に、人間族に、『勇者』というものが現れた。その者は、人間族、エルフ族、獣人族、天使族では、持ち得ない力を持っており、『勇者』は、仲間とともに、『魔王』へと挑んだ。」

「なるほど・・・結局、どうなったんだ？」

「『魔王』に挑んだ『勇者』達は、幾多の戦いの末、『魔王』を打ち倒すことができた。」

「ほう、さすがだな。ということは、その大陸は平和が訪れたんだな。」

俺は、素直に勇者やるじゃないかと思っていた。

「そうじゃ、平和は訪れた。」

「だったら、俺は何の関係が」

そう、平和が訪れたのなら、俺とは何の関係が……。

「まあ、待て。話には続きがあるんじゃない。」

「……どうということだ？」

俺は、眉を潜めて質問した。

「話を戻そう。……たしかに、『勇者』達は、『魔王』を打ち倒し、平和を手に入れた。しかし、それは、つかの間のことだったのじゃ。」

そう、世界は滅びようとしていた。」

「ん？どうということだ？まったく話が見えないのだが……。」

「まあ、普通ならそうじゃろうな。なぜ世界が、滅びへの道を進むことになってしまったのか……それは、『魔王』と世界は繋がっていたのじゃ。」

「『魔王』と世界が繋がっていただと？」

「そうじゃ。魔王が死すれば世界は死に、世界が死すれば魔王は死ぬ運命だったのじゃよ。」

「なっ！？そんなことがありえるのか！？」

「・・・現にそなっておるのじゃよ。」

「ふむ、その異世界のことについては分かったが、結局俺はなんなんだ？」

「その後、世界が救えないと思った勇者達はある決断をしたのじゃ。」

「決断？」

「そう。神々に頼み、この世界を救ってくれる『モノ』が現れるまで永久的に時間をとめることを。」

「・・・なるほど。その救ってくれる『モノ』ってのが俺ってことか。」

俺は、面倒な話だ・・・と思い、頭を掻きながら、そう言った。

「そうじゃ。」

「んで、俺はどうすればいい？」

「そうじゃな。今のままでは、到底無理であろうな。まず、力が無い。」

「なるほど、合理的だ。だがどうやって、力をつける?」

「簡単なことじゃ。ほかの世界へと行って、修行をするのじゃよ。」

「なん・・・だと?」

「まあ、そう驚くでない。仕方がないことじゃ。しかし、今すぐには言わん。いろいろと考えることもあるだろうし、いくつか能力を与えなければ、なにもできんじやろうからな。じゃから、お前達の世界の時間で3日の猶予を与える。それまでに、覚悟とほしい能力でも考えておくことじゃの。」

「・・・分かった。」

「ならば、寝るが良い。次に起きたときは、お主の部屋のベッドの上じやろうて。」

「ああ。」

そう言つて、俺は、この世界から逃げるために、眠りに着いた。

ただ、いつもとは違い、たしかに「期待」と「希望」を持って・・・

第2話（後書き）

はい、あとがきです。

何も書くことないです。

言うことといえば・・・

誰か私に、文才を分けてください。

あと、感想や誤字脱字などおまちしております。

それでは、また次回お会いいたしましょう。

おしらせ

どうも、その輪廻の先にある物は・・・です。

このたびの、お知らせは、この小説の一時停止についてです。

この小説は、Arcadia様のSS投稿掲示板のほうにも、出させていただいたのですが

そちらで、見てくださった方のご指摘で、勝手ながら、この小説を初めから修正することにさせていただきました。

ご期待をされていた方なども、もしかしたらいらっしゃるかもしれませんが

ご了承のほうをお願いいたします。

前作も今作も、不甲斐ない気持ちでいっぱいです。

この度は、とてもすいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414r/>

俺が、異世界を救う？

2011年10月7日10時43分発行